

子供らと生きて。

（ばあちゃんの原爆日記）



子供らと生きて。(1)

私は明治40年末広町（出島）に生まれました。
主人は三菱電機の鋳物士で岩川町の工場におりました。
子供は7人おりましたが、病気やらなにやらで亡くなって、
今は5人です。

原爆の時は西坂の本連寺の裏手に住んでいました。
娘が4人男の子が2人おりました。

丁度1ヶ月前の7月7日、青年学校に行っていた長男が
肺炎で亡くなったばかりでした。

残った子は上が国民学校を卒業して、
徴用で長工醤油に勤めていました。

1番下の子は2歳の子でした。
原爆が落ちた時は奥の8畳の間で末の子を寝かしつけていました。他の子供達もそばにおりました。

爆音が鳴ったのですが、非難は解除になっているから、
遊軍機なんだろうと、そのまま気にもしていませんでした。

パーッとしたのでしょうか？
後の石屋さんの石垣にパーッと青い火が差し込みました。

そして、その辺の物が飛んで、布団でも何でも
細長い家を通して表にほおり出されてしもうたとです。

「母ちゃん、母ちゃん」って言うもんですから、
よくよくみると、畳みごと子供らが床下に落ちていました。

床下に落ちた子を引っ張りあげて、
ほかの子供たちと一緒に外に逃げ出したとです。

お金や預金通帳を入れていたカバンが、
いくら探しても見当たらないので、そのまま逃げたとです。

皆が「後はよかけん逃げんねっ」て、
言うもんですから、とにかく山手に逃げました。

上から見たときは、大黒町辺りから煙が出ていましたが、
まさかここまで燃えるとは思いませんでした。

山の方の五社神社というお稲荷さんまで逃げました。
その間に、次男は鍋や釜を取り出して水槽のなかに沈めたり、
フスマまで墓地に持ち込んだりしていました。

子供らと生きて。(2)

浜平(西坂の上)に主人の親里があったので、そこに行こうとどンドン山を登ったとです。

そして向こうから来る人に浜平の様子聞くと、「もう浜平は燃えていて、家もなんにもないよ」って、言うじゃないですか。

浜平さん行っても駄目ばいねって思いました。

金毘羅山からおりてくる兵隊さんに合ったので、「どっちに逃げたらよかでしょうか？」って聞くと「左手は駄目だから右の方へ行きなさい」って言われました。

行くと、神社の近くに顔も手もひどく焼けたでれた、15、6の男の子が座っていて「おばさん、おばさん、水の欲しか～～」って言うじゃないですか。

水を持っていなかったので、「ちょっと待ってね」といって、五社神社へ行って水を持ってきて、その子供に飲ませました。

「お母さんたちも上がってくるから、あんたも動かずに腰掛けときなさい。」っていいました。

顔も何も誰やら見分けもつかないぐらいに焼けてしまって・・・動員で働きよったとでしょうね。

上へ行く間、あちこち怪我人がいっぱい、どこへ行けばよかろうかって思いましたが、とにかく木の影の溝のある場所に一旦落ち着きました。

ひとり座布団を抱えていたので、それを敷いて皆を座らせてそのまま夜までおりました。

その時長女が、「母ちゃん、母ちゃん。」と言って、あのカバンを出してくれました。

「あんたが持ってきとったとね。よかった！」
と言うて喜びましたとよ。

本当に助かりましたとよ。

自分の学校の本はほっというて・・・。

皆、怪我はせずよかったです。

その時はまだ下は燃えていませんでしたが、
夕方頃、上がってくる人に「西坂辺りはどうねっ？」
って聞いたら「もう燃えてしまいよる」って
言うじゃありませんか。

ああ、もう何もかもなくなるのかと思って、
もうなんとも感じずに、頭が馬鹿みたいになりましたとよ。

子供らと生きて。 (3)

昼過ぎ頃、ポツポツ雨が降りだしました。

ひどくはありませんでした。

「あら、雨たいね」っていうくらいですね。

上からみればもう、街中が燃えていました。

4時、5時頃には、私の家も燃えていたんでしょうね。

夕方になるとお父さん達が上ってきて、

「誰とかやー、誰とかやー」

って名を呼んで探し回りはじめました。

あんなに気の利いたうちの主人がなんで来ないんだろうか？

て思っていたんですよ。

それが・・・皆んなやられてしまってたんですよ。

主人が居た岩川町の三菱電機の鋳物分工場は、全滅やったとです。

8月1日の空襲の時は主人は助かって、死んだ人の葬式をしたりしたとですよ。「助かった、助かった」っていってましたね。

あとで兄弟達が、鋳物分工場へ行って見てくれたんですが、

「もう何もなか、骨もなかった」ていうてきました。

私も子供がいるものですから、身動きならず、とうとうそのままです。

その晩は山の上に寝ました。

下のほうは燃えつづけて、真っ赤になっとりました。

小さい子供達は怖がって、皆んな山の脇のくぼ地に入りこんで、一緒に寝ました。

夜通し街は燃えて、飛行機が上をずっと飛んでいました。

朝起きて、浜平に行こうかどうかと悩みましたが、

とにかく家を見てこなきゃと、またぞろぞろ下りたんです。

もう、きれいに焼けてしまっていて、
あちこちにタンスの引き手が散らばって残っていただけでした。

そこに残って火を消した他の人の家は残っていたのですが、
うちのはもう何もなかったです。

焼けたり盗られたりしたとでしょうね。

水槽に入れていたお釜でもなんでも沈んでいたけど、
木のフタは上に浮かんで焼け焦げていました。

子供らと生きて。(4)

それから、また上って浜平の親元に行ってみたら、
そこも家が吹き飛ばされてしまっていて、
一旦、その防空壕におりました。

食事は大村辺りから握り飯が来たのをもらったり、
自分達で炊いて食べたりしていました。
握り飯はもう腐っていました。

飛行機がまだたくさん飛んでいて、
小さい子供らは「ほら、泣かすなよ！飛行機に聞こえるから！」
ってよくまわりの人に言われてしまいました。

一度は子供をおんぶして、飽の浦まで行ったことがありました。

瀬崎の辺りでは、軒下に馬が馬車を引いたまま死んでいたり、
稲佐橋から死骸の付いた縄がぶらぶらしとったり、
カン詰め会社からは「ぽっぽっ」て缶詰が飛んできて危ないし、なかなか歩く事が出来ませんでした。

電信柱も上のほうまで、燃えよるしねー。

翌日か翌々日位だったでしょうか。
火は何日間かくすぶっていました。

死骸を焼く匂いが聖徳寺の所から、
ずうと上のほうまできよりましたと。

浜平の壕に何日かおりましたが、
物は何もなし、電気もなし、夜は真っ暗で、
子供が「もうどっか行こう」って言うもんですから、
熊本の姉の所へ行く事にしました。

電気の会社の人でしょうかね。
駅前に出張してきた人からお金をもらって、

長崎駅から乗りました。

もう満員で・・・止まり、止まり行ったとですよ。
私のおった車輦にはあまり怪我人がおらんやったです。

佐賀駅で止まって、蚊が多かったのを覚えています。
とにかくたくさん乗っ取ったとね。

熊本の下益城郡の姉のところには18日位おりました。

すると・・・。

アメリカ兵が来るから、皆んな避難せろっ！

て言うですもんね。

姉も「自分達は避難するから、あんた達もどこかへ逃げんね」

って言うんですよ。

それでまた熊本と鹿児島県の境の免田という所まで
汽車でいきました。

子供らと生きて。(5)

免田には伯父さんの家がそこにあって、
妹が疎開していったとです。

人吉で乗り換えて行ったんですが、
そんな時も、もう普通には電車に乗らずに、
みんな窓から乗り込んだんですよ。
窓の外には下駄や履物が散々です。
私も裸足だったんだと思います。

後から思えば、よく子供一人も迷子にせず、
連れて来れたもんだと思います。

次男に大きい荷物を背負わせて、
一人一人残った鍋釜の道具や親戚からもらった敷物を
小さくむすんでも持たせてですね。
もう、哀れな格好やったとですよ。

やっと、免田で降りました。
汽車の中で「ほら、免田はあそこよ」って教えてくれた人が
いたから助かったとです。

駅を出て、皆でぞろぞろ、後に戻っていきましたとよ。
きれいな月夜で、道にカンカン照って、
遠くに明かりが見えるのに、
行っても行っても辿り着かないんですよ。

大きい子供は「母ちゃん、狐にだまされとっと、
もうここら辺に座っておろうや」っていうし、
小さい子供は「もう歩かない」っていうし、
それを騙し騙しなだめて、ようやく人家に辿りついたとですよ。

そこは、クラブ（公民館）で、
丁度、妹達の所に訪ねていく人がおりましたと。

それで、「一緒に来んですか」って、

言うてくれて助かったとです。

妹達と会うと、喜んでくれてね。

妹の主人は、三菱電機の技師で、

疎開の時に一時、西坂の家に置いてあげた事があったとです。

それで、もしもの時はいつでも来いて言うと思ったですけんね。

それでも・・・大勢で行って向こうもびっくりしたでしょう。

子供らと生きて。(6)

1ヶ月もおりましたかね。

お金はあったので、1里も先まで買い物にいました。

米、味噌、果物なんかをね。

塩の切れたときは駅を二つも三つも行った長浜って所まで行って、1升も頑張って買ってきよりました。

その主人は学歴がありましたから、

出征しても戦地には行かず、

東京の何とかいう学校に行ったとですが復員して、

帰って着とりました。

風呂は本家で頂いていましたが、

ある晩、私が風呂に入っていた時に・・

其の主人が伯母さんと

話しているのが聞こえたのです。

「兄弟がいるからって頼ってこられても・・・・・」

・・みたいな事を言っていました。

それを聞いて私は、

この夫婦が私たちのせいで喧嘩をしましてはたまらない。

早く帰らなきゃと思いました。

家は無くても、何とかなるだろうと思って

また長崎に帰ったのです。

結局、2ヶ月とはいなかったですね。

長崎駅に下りたら、

もうきれいに焼け野原になっていて、

さて何処に行こうかと思いましたが、

まず、浜平に上がってみました。

主人の妹夫婦がいて、一緒にしばらく暮らしました。

山の上だったので、下の方では

防空壕の片付けの音がしていました。

まだ働きに出るどころではなく、
まずは住む家をなんとかしなくてはいけませんでした。

子供らと生きて。(7)

深堀に行くと言っていた

そこの主人の兄弟たちも帰ってくるので、
早く家を見つけておくように言われていましたが、
子供はおるし、なかなか家が見つからずにいました。

ある晩、とうとう妹の主人がやって来て、
「まだどこにも行かずにいるのか」って言うて怒り、
「たった今出てくれろっ」て、言うてですたい。

妹は「今夜はまだよかさ」って言うてくれたんですが、
晩御飯も食べかけだったんですが、
そのまま荷物をまとめて出たとです。

悲しかったですばってん、
そんな事言われて、いるわけにはおれず……

其の晩は本連寺の墓場で子供と寝たとです。

そしたら翌朝、昔の知り合いがやってきて、自分達が集めとった疎開の材木を寄せて、元の家の
上の段の崖に立てかけて、
住めるだけの小屋を立ててくれたとですよ。

その小屋で貰っていた毛布で暮らしました。

仕事よりも食べ物の買い出しが大変でした。
これまで主人ばかりあてにしていたが、
どうしても自分でしなくちゃなりませんでした。

17の息子を連れて、
その子のお母さんになる人を田結まで訪ねて行って、
「ジャガイモ」とか「かぼちゃ」とか売ってもらって、
お昼ご飯をご馳走になって帰ってきよりました。

そのいもご飯のおいしかったこと。

矢上の上の方ですよ。

下の子供をおんぶして歩いて行きよりました。
その遠いこと。

矢上の東望の浜を通り越して、
またずうとむこうへ行きよりますとよ。

まだ若かったですけんねえ、
何か売ってもらえればそれが楽しみで。
夕方遅くに帰りよりました。

子供らと生きて。(8)

毎日、小さい子供達がお腹を空かして待っていました。
とにかく食べるとに一生懸命でした。

朝から駅に出て、なにか分けて貰う人を探して、
あっちこっちのヤミ市にもよく行きました。

田舎に知り合いもなし、熊本は遠いし・・・。
もう食べ物買いばかりしよりました。
だんだんお金もなくなってきました。

近所の男の子に「ことぼし（小さい石油ランプ）を
買ってきてやるけん」っていわれて、
1500円も騙されて取られたこともありました。

進駐軍が、娘のいる所にはずうと遊びに来て、
チョコレートとか何とかあげていました。
しかし、うちはみんな小さいし、
大きい子達は男ばかりなので、おかしくてね。

あのころは4000円で家が建ったですもんね。

まだお金はあったし、市役所に頼んで大黒町辺りにあった、
材木を拾ってきて、畳なんかも取りにいて建てたですよ。

元の家の上の段に土地を借りて、三畳と四畳半でしたかね。
地開きも自分達でしましたと。

そのころ熊本の姉から、また出て来んねって言われたとですよ。家のお金を払ってしまえばお金
も無くなってしまおうし、
仕事を世話して貰う当てもないし・・・。

私もブラブラしとったですけんね。
思い切って、それからまた熊本に行ったとですよ。

何か仕事もあるだろうと思うてね。

それが悪かったとですね。

長崎におればよかったですばってんね。

再び子供らと熊本へ。

子供らと生きて。(9)

姉の主人の本家は大きな百姓なので、
そこの小屋を借りて、自分で床を敷いたり、
クドを作ったりして住みましたとよ。
食べ物は配給をもらいよりました。

足りない分は持っている品物と食べ物を交換して・・・
配給所の人に姉が相談して、先の分、先の分と
渡してもらいよりました。
ヤミを買わなくてもいいようにですね。

お金もなくなったし、いろんな仕事をしました。
三つの村を子供をおんぶして・・・。

2人、3人連れて新聞配達もしました。
その道、道でたまご買いもしました。

水前寺公園の浦のそばで、
進駐軍の土方(どかた)の作業に通ったこともあります。

子供は姉に頼んで預かってもらい、
私はトラックいっぱい積み込まれて、
足の置き場もなく座らされて運ばれていきました。
女も男もいっぱい、こぼれ落ちるほど乗って。

紗の着物で冬の綿入れを作って
着ていったことを覚えております。

広い所だったので、自分の現場を離れれば、
元の場所に戻れないこともありました。
思うような手仕事もなかとです。
皆んながしてましたから、割り込む隙もなかとです。

暇な時は、わら草履作りもしました。

上の娘もいっしょに手伝ってわらを叩いたり・・・
縄をなうのは隣の伯父さんに手伝ってもらって・・・。

そうしたら、奥さんが焼きもち妬いてしまって、
つらく当たられて、子供もいじめられたりしました。

一足1円で、三十足作っても30円ですよ。
物価はまだ安かったって云うてもね・・・。
慣れない仕事を次々採りましたと。

その伯父さんは姉の兄さんになる人で、
本当にお世話になりなした。
農家とブローカー兼業の、ほんに親切な人でした。

子供らと生きて。(10)

長女はそれから村のお医者さんの家に
住み込みで手伝いにいきました。まだ14歳でしたかね。

そしたら、同年輩の子供がいたので、
すぐに嫌って云うて逃げて帰りましたと。

それから不知火の製糸工場にやりました。
寮に居てご飯も食べられるから云うてね。

次男は大牟田の炭鉱に世話してもらって行きましたと。
17歳だったけど、体格がよかったので検査も通ってね。

その子が1番たくさんごはんを食べよったですもんね。
炭鉱に行けば腹一杯食べらるけんって言うたら、
喜んで行きましたとですよ。

炭鉱の暗さは、ここの闇の暗さとは
違うっていうて行きよりましたと。

かわいそうでしたが、どうしようもなくね。
他の子供たちは、新聞配達をしたりして、
皆んなで頑張りよりました。

次女と三女は杉合小学校に入りました。3年と1年です。
三男は杉合中学校の1年に入ったとですが、
この子が兄とは違って小さい子で、
学校に行きたがらないんですよ。
自分も働くけんていうてね。

それで、学校を1年で辞めて、
こ使いさんの世話でもある先生の家に
住み込みで加勢にやりましたと。

農業の手伝いをしてもらえれば、
勉強も晩に観てやるけんて云われて。

しかし、朝は4時から起きて草刈りに出るし、
1日中働いていて勉強もあんまり出来ないみたいでした。

本当に私は力がなくて・・・情けなくて・・・
子供が可愛そうで・・・。

このままでは共倒れだから、
子供を思い切って養子にやらんかって、
姉が言い寄ってきたとですよ。

養子先も見つけてくれましたばってん、
やっぱやりきれんとですよ。

こうしてせっかく助かって生きてきたのに、
バラバラになる事はないって思うとですよ。

長崎の姑に預けて来いとも言われたばってん、
それも出来なくて・・・。
手放す事が出来なかったですもん。

子供らと生きて。(11)

そのうち長崎の姑さんから、
代筆で手紙が届きました。

「自分もじいさんが死んで心細うなった。
物があるうちは他の子供達が来て、
泊まってくれて寂しくなかったばってん・・・
なんもなくなると、誰も来てくれんようになった。
お前の寂しさがよう判るようになった。
畑も少しあるけん、戻ってきて一緒に暮らそう」
って、書いてありましたとよ。

じいちゃんは原爆で鼻のところを少し怪我してたんですが、
私が熊本に行ってる時に死んでしまったとです。

どうしようもなくて、
また随分悩んだとですばってん、
私には他人でも、子供達にはおじさんとおばさんがおれば、
まだマシやろうかねって考えて、
また戻ってきて、浜平に行きましたと。

そしたら、4、5人いた主人の兄弟達は、
それを気に食わないんですね。
私は長男の嫁でしょうが。
畑もみんなに分けてしもうとったですけんね。

とにかく、ばあちゃんの家で暮らす事になりました。
六畳と四畳半の家やったとです、
小さい子供達はそこから西坂小学校へ通いました。
1番下の子供もこっちで学校に入りました。

熊本に3、4年おったでしょうかね。
製糸に行った長女と大牟田の次男は残ってきてですね。

あの三男の子は長崎まで帰って来ましたが、また戻りました。
「もう一時、辛抱せろ」って、ばあちゃんに言われてねー。

まだ中学1年の頃ですけんね・・・。

「もう少しこっちの暮らしがよくなったら、迎えに行くから」
って云うて聞かせて帰りましたと。

あとで製糸の姉が休みの時、訪ねてきてくれたとですよ。

「こき使われてて可愛そう！早く弟を呼び戻してやってくれんね！私は辛抱するから・・・」って
、手紙を書いてきました。

それから、暇を貰ってつれ戻しましたと。

学校にやるけん、っていうてね。

でも、学校どころじゃありませんでした。

私が働きよったけん、その子も切り盛りする方ですよ。

13歳でしたかね・・・。

子供らと生きて。(12)

私はまだ色々拾い仕事でした。

枇杷の時期は「枇杷上げ」といって、貨車に積み込む仕事のあった季節の仕事ですから、短いんですよ。

お盆前には墓掃除の仕事に頼まれていたりね。

畑はイモを2回だけ取りましたかね。

山の上の方できつかったとですよ。それであとは返しました。

民生委員の人の世話で星野組に臨時で行ったとですが、

そんな時分はひどかったですねえ。

「あんた、1週間辛抱すればあとは楽になるけん」っていわれてね。『何を持って来い、「がん爪」を持ってこい』って

云われても、その名前も判らず、随分まごまごしました。

松山の道路現場ですよ。7ヶ月ばかりいきました。

マツや練炭でも働きました。

その頃、上の息子が炭鉱は嫌って云うて帰ってきとりました。

長女はしばらく熊本におったとですが、

製糸は手が荒れるとですね。

皆んな帰ってきたわけです。

三男は、近所の親戚の人の世話で新地の中華街に行きました。

話を持ってこられた時は三男は釣りに行ってましたが、

「本人が行くと言うたらやりましょう」って答えました。

帰ってきて話を聞いたら、「僕行ってよかよ」って

云いましたからやりましたと。10年辛抱しました。

そばに酒があるものですから、肝臓を悪くして最後は心臓ショックで死にましたと。家内と子供一人残して。

孫は高校生です。死んだ息子は体は小さかったですばってん、

頭は誰より良かったとですよ。

今は子供達はみんな独立していますが、

貧乏しているのは私だけ。

みんな、どうにかこうにか自分達で食べられることになったけん、良かったですばってん、私は今心臓が悪いし、胃腸も悪いし、血圧も定まらんとです。

若い人や原爆を知らん人達に言いたいことは、やっぱり（戦争はいや）って言うことですね。もう二度と嫌ですね。戦争だけはしたくないです。

今度戦争になれば、また原爆とか水爆でしょう。戦争だけはしたくなかです。有事立法とか、聞けば身の毛がよだつとです。どうしてそんな事をするとでしようかね。早く援護法を作ってほしかですね。戦争だけはおこらんようにしてほしかです・・・。

気が向いたら、昔の人たちの戦争による苦しさ貧しさ、でも子供のことだけを大事にする。子供のことだけを思って生きてきたお年寄りがいることだけでも感じてほしいです。

今の世の中、子供が邪魔になればすぐ殺す、捨てるのが横行しています。昔の人は自分は食べなくても、子供にだけは食べさせてくれました。そういう事を私はよく覚えていています。

子供らと生きて。(あとがき)

祖母のこの日記を見て、つじつまが合わない部分がたくさんあります。

確かにこの日記を書いたのは祖母が60歳後半頃で、忘れてしまった事もたくさんあるでしょう。

しかし、この日記の中では肝心の祖父との再会した話が書かれていません。

文中で「頭がバカになった」と書かれていますが、忘れてしまうような事ではありません。

祖父は祖母と結婚するためにキリスト教に改宗して実家を勘当させられてしまったほど、祖母を愛した人です。

私の母が言うには、家族で山の防空壕にいる時に、丸こげになった祖父が登ってきたそうです。自分の名字を叫びながら、家族を探しに帰ってきました。

顔は丸こげになっててわからなかったそうですが、その声と指輪でわかったらしいです。

「水、水をくれ～」と叫んでいたそうです。

当時の人達も、ピカドンを浴びた人が水を飲むとすぐに死んでしまう事は知ってたみたいで、その最後に引導を渡した(水を与えた)のは祖母だったのです。

私の母はまだ2歳の子供だったので、

この話も人づてに聞いた話だと思います。

本当の話はいまだにわかりません。

しかし、私が子供の頃に祖父の骨を取り出し、墓石に収めた記憶があります。

骨は放射能を浴びているので、取り出すには数十年かかるそうです。

「ここにおじいちゃんが眠っているのよ」

そう言われつづけて、墓石じゃない所の石にいつも線香をあげていました。

つまり、たしかに祖父は帰ってきたのです。

もしくは家族の誰かが見つけたはずなのです。

でも、祖母の日記には祖父の事は書かれていません。あんなに愛していたはずなのに・・・
きっと、あいするがゆえに、祖父が丸焦げになった記憶を全て忘れているのでしょう。

私にとって原爆がどうだとか、戦争がどうだとか、はるかに遠すぎて何の意見も言えません。

ただ、子が親を殺し、親が子を簡単に殺してしまう時代に、

昔の人がこんなにも子供を愛して大切に育てていた事を知ってもらえたらと思っています。

祖母が2歳の娘を毎日必死に抱えてくれたおかげで

私の命はあります。

